



昭和 19(1944)年の「講書始」では、時代を反映して、『洋書は気象技監藤原咲平より「戦争と気象」を、それぞれ御聴取になる。』と記録されています。「洋書」と記載されていますが、定かではありません。なお、荒川秀俊氏の著書として昭和 18(1943)に岩波新書で発行された「戦争と気象」があります。

戦争と気象については、明治 38(1905)年 5 月 26 日、日露戦争の日本海海戦時に中央気象台からの天気予報文「天気晴朗ナルモ浪高カルヘシ(抜粋)」や、昭和 16(1941)年 11 月の気象報道管制(天気予報の一般への発表の禁止)などが有名です。また、明治・大正・昭和のはじめにかけては、その歴史とともに台湾、朝鮮半島、樺太、ミクロネシア、さらに中国東北部(旧満州)へと観測所や測候所が設置されて行きました。終戦後、多くの職員が復員し中央気象台に復帰し、これにより連合軍最高司令部(GHQ)の指示による気象台の機構・人員の整理、昭和 24(1949)年の(財)日本気象協会の設立や気象台 OB による民間気象サービスの開始などにつながり、黎明期の民間気象事業を形作りました。

世界的には、1854 年のクリミア戦争の時に暴風雨でイギリス・フランスの艦隊に大きな被害が出たことを契機に、フランスで気象局を設立され、1863 年には天気図の作成が開始されています。また、第二次世界大戦のノルマンジー上陸作戦に向けてアメリカで近代的な波浪予報技術が開発されたことなどが有名です。

戦後は、昭和 22(1947)～38(63)年までの 17 年間にわたり台長・長官として、その後も要職を務められた和達清夫氏の名前が多く見つけられます。

- ・昭和 29(1954)年の最初の進講では、「気象観測について」取り上げられています。この年には大阪で初めての気象レーダーの運用が開始されており、近代的なリモートセンシングによる気象観測が本格的にスタートを切った年です。
- ・昭和 37(1962)と 49(74)年(高橋浩一郎長官)には、当時の天候を反映して、異常気象に関する話題が取り上げられています。また、
- ・昭和 37(1962)年には三宅島噴火、昭和 41(1966)年には松代地震、昭和 43(1968)年には十勝沖地震を受けて、地震火山関係の説明が行われています(昭和 41(1966)・43(68)年ともに元長官の和達氏による)。

また、「東京オリンピック」が開催された昭和 39(1964)年の「講書始」では、退官直後の和達氏が「近代の気象学」について進講しています。

作家の保坂正康氏の著書によると、昭和天皇は、毎年、台風、冷夏などの異常気象、地震などの報に接すると、すぐに気象庁などに連絡をとるよう侍従に促がし、例年とどのように異なるのか情報を確認するなど、気象や自然災害への関心が高かったとしています。これらの逸話に加えて、「昭和天皇実録」の行幸や進講の記録からも、昭和天皇の生物学者(科学者)としての一面と社会と国民生活への影響に常に気を配られていたことを伺うことができます。

“昭和”は、戦災、戦後復興、高度経済成長、バブル崩壊等、激動の時代でした。さらに“平成”も阪神淡路大震災や東日本大震災など多くの未曾有の自然災害に見舞われました。外務省は、海外に向けて“令和”の英訳として“Beautiful Harmony(美しい調和)”を発信していますが、“令和”に込められた新たな思いに相応しい時代となることを期待しています。

(参考文献)

宮内庁編(平成 27～31 年)：昭和天皇実録(第一～十八・索引)、東京書籍。

気象庁編(昭和 50 年)：気象百年史。

保坂正康(平成 31 年)：昭和天皇(上・下)、朝日新聞出版社。

(理事長)